身体部位を表す所有表現の多様性とその表現の獲得について*

松藤 薫子
日本獣医生命科学大学 英語学教室

要約

本論文では，所有を表す広範囲な意味の中で「人の身体部位の所有」に焦点を当て，それが表す形式の発達過程に関する実証的資料を検討し，所有の言語化に関わる普遍的な原理ついて考察した。その結果，英語児は主語卓越型言語の特徴を，日本語児は主題卓越型言語の特徴を言語発達の早期に獲得することから，その特徴と複雑性の法則が影響して，英語には外的所有構文があり二重主語構文がみられず，日本語には，二重主語構文があり，外的所有構文がみられないという結果が生じると議論した。生成文法理論の枠組みで言語獲得モデルを仮定し，言語獲得理論に，主題卓越パラメータや複雑性（概念と形式の対応関係，概念/統語構造の基本と派生の関係）を捉える法則があれば，身体部位表現の言語間変異と発達過程が説明可能であることを主張した。

キーワード：身体部位表現　子どもの言語発達，形式の多様性，主題卓越パラメータ，複雑性

1. はじめに

諸言語において表現の形式と意味に多様性がみられる。このような多様性は子どもの言語獲得の産物である。本論文では，人間は所有をどのように認識し言語化するのかという問題を解明するために，所有を表す広範囲な意味の中で「人の身体部位の所有」に焦点を当て，それが表す形式の発達過程に関する実証的資料を検討し，所有の言語化に関わる普遍的な原理について考察する。

2. 所有表現の意味と形式

2.1 所有の意味

概念とは人間が現実世界を範疇化し，そのような範疇が人間の脳内に形成されたものである。意味とは概念を言語に移し変えて，ことばで表示されたものである。言語化された概念が意味である。所有の概念や意味を定義するのは困難であると指摘されている（Seiler 1983; Langacker 1995; Heine 1997; Herslund and Baron 2001; Stassen 2009; Akihenvald 2013; Mazzitelli 2015; Tsunoda 2018 等）。

松藤（2023a）は，所有動詞 have を含む叙述文が表す意味に焦点を当て，認知意味論

連絡先：松藤薫子(shigeko@nvlu.ac.jp)

（Cognitive Semantics）に基づき，Taylor（1996），Heine（1997），Mazzitelli （2015），松藤（2016）を踏まえ, (1)のような 10 種類の所有の意味があり, 10 種類の意味には段階的典型性という特徴があると指摘した。(2)は(1)に示した意味タイプの例文である。

(1) 10 種類の所有の意味タイプ

a. 永久的な所有（alienable permanent possession (ownership): alie perm）
b. 一時的な所有（temporary possession: temp）
c. 身体部位の所有（body-part possession: body part）
d. 抽象的事物の所有（abstract possession: abst）
e. 社会的譲渡不可能な事物の所有（social inalienable possession: social inali）
f. 社会的譲渡可能な事物の所有（social alienable possession: social alien）
g. 人間以外の非動物による譲渡不可能な事物の所有（inanimate inalienable possession (part-whole relations): inani inali）
h. 人間以外の非動物による抽象的事物の所有（inanimate abstract possession: inani abst）
i. 物質の携帯所有（physical possession: phys）
j. 人間以外の非動物による譲渡可能な事物の所有 (inanimate alienable possession: IN/A)

(2) (1)の意味タイプの例文 （Heine 1997: 34-35, Mazzitelli 2015: 23-25）

a. alien perm: Mary has a new car.
b. temp: I have Tom’s car (= I use it now).
c. body part: Humans have legs and arms.
d. abst: I have a problem.
e. social inali: I have a son.
f. social alien: Mary has good friends.
g. inani inali: Trees have roots.
h. inani abst: Love has many names.
i. phys: I have money on me.
j. IN/A: That tree has crows on it.

Table 1 は, 5 つの典型的特徴（所有者 PR は人間 human である，所有物 PE は具体的物体 concrete である，所有関係において，所有者の所有物に対して支配力 control（使用可能性・使用許可性）がある，所有者と所有物が空間的に近い location, 所有関係が続く期間が長い time）に関して，それぞれの意味タイプがその特徴を満たしているかどうかを示したものである。Table 1 の + はその特徴を満たす場合， - はその特徴を満たさない場合, +/- はその特徴をどのように定義するかで満たしたり，満たさなかったりする場合があることを示す。A が一番典型的で，D が典型から一番遠いことを示す。

Table 1　10 種類の所有の概念が持つ典型的特徴

	alien perm	temp	body part	abst	social inali	social alien	inani inali	inani abst	phys	IN/A
I. PR human	+	+	+	+	+	+	-	-	+	-
II.PE concrete	+	+	+	-	+	+	+	-(/+)	+	+
III. control	+	+	+/-	-	+/-	+/-	-	-	+	-
IV. location	+	+	+	+	+/-	+/-	+	+	+	+
V. time	+	-	+	+/-	+	+	+	+	-	-
典型段階性	A	B	B	C	B	B	C	C	B	D

Table 1 から，典型性の段階は，永久的な所有が一番典型的で，次に身体部位の所有，社会的譲渡不可能な事物の所有，社会的譲渡可能な事物の所有，一時的な所有，物質の携帯所有であり，その次に抽象的事物の所有，人間以外の非動物による譲渡不可能な事物の所有，人間以外の非動物による抽象的事物の所有，典型から一番遠いものが人間以外の非動物による譲渡可能な事物の所有である（松藤 2023a）。

2.2　所有の形式

所有の意味を表す形式は様々ある。Aikhenvald（2013）の類型論的考察からの知見を踏まえ，(3)のような形式と特徴がある。所有者を表す名詞句 NP1，所有物を表す名詞句 NP2 とする。

(3) 所有表現の形式と特徴

a. 名詞句による所有表現（名詞的所有 Nominal Possession）

所有者と所有物を表す名詞句の順序は, [NP1　NP2] と [NP2　NP1]がある。

所有を表す標識がなく 2 つの名詞句が並ぶ形，標識が付加される場合は，所有者 NP1 だけに付加，所有物 NP2 だけに付加，両方に付加される場合がある。独立した所有標識が使われる場合がある。

b. 文による所有表現

b1. 叙述的所有（Predicative Possession）

所有動詞や繋辞動詞のある文，外置または主題化された所有者 NP1 はあるが動詞を欠いた文，所有を表す派生接辞のついた文がある。

b2. 所有者と所有物を異なった構成要素で表す文（Clausal Arguments）

所有者 NP1 が動詞の項（主語や目的語）で所有物 NP2 が斜格（対格や与格など）を持つ名詞句である外的所有（External Possession），所有物が動詞に組み入れられた名詞抱合（Noun Incorporation），動詞の語幹の中で表す動詞派生（Verbal Derivations）が

ある。

c. ひとつの文を超えて所有関係を表す表現

[所有者が話題化された所有者 NP1+所有物 NP2+状態を表す動詞]からなる二重主語構文（Double Subject Construction），所有者 NP1 に所有物 NP2 を含む関係節がある（Relativization On Possessor）などがある。

松藤（2023b, 2023c）は，英語，日本語，中国語は(4)のような形式を使用することを明らかにした。

(4) a. 英語：名詞的所有，叙述的所有，外的所有

b. 日本語：名詞的所有，叙述的所有，他動詞文，所有受動文，二重主語構文

c. 中国語：名詞的所有，叙述的所有，二重主語構文，他動詞構文，自動詞構文，話題文

2.3　形式と意味の対応関係

形式と意味の対応関係は(5)のとおりである。(4)の形式が(1)の 10 種類の意味タイプのうちどの程度表すかを(5)の(　)に数字で記す。例えば，英語の名詞的所有は 10 種類の意味タイプを表す。

(5) a. 英語：名詞的所有(10)，叙述的所有(10)，外的所有(2)

b. 日本語：名詞的所有(10)，叙述的所有(10)，他動詞文(3)，所有受動文(7)，
二重主語構文: 自動詞文(9)；感情形容詞文(4)；属性形容詞文(10)

c. 中国語：名詞的所有(10)，叙述的所有(10)，二重主語構文(9)，他動詞構文(10)，
自動詞構文(9)，話題文; 動詞が文末(10)；他動詞(10)；自動詞(9)

以上のように，それぞれの言語において，各形式が表す意味の範囲，表現形式の種類，対応関係に相違がある。

(4)のような様々な形式を使用して，所有を表す複数の意味タイプのうち，どの意味タイプが一番表されているのかを考察すると，身体部位の所有の意味であり，それが所有の意味の中で中心的な意味タイプであると考えられる。(6)は英語，日本語，中国語の身体部位の所有を表す例である。下線部分は人とその人の身体部位を表す語句である。

(6) a. 英語：　Tom’s legs are long.　Humans have legs and arms. Tom hit me on the hand.

b. 日本語：太郎の手足は長い。人間は手足がある。太郎が床屋で髪を切った。太郎は花子に頭を殴られた。太郎は顔が腫れた。太郎はお腹が痛い。太郎はお腹が大きい。

c.中国語：

名詞句所有： wo de shou bi ni de shou da
my POSS hand than you POSS hand big
私の手はあなたの手よりも大きい
叙述的所有： ren you shou he jiao
human have hand and leg
人間には手と足がある
二重主語構文：na ge guniang(,) yanjing da, bianzi chang #(,)カンマをつけると話題文
that CL girl eye big braid long
あの少女の目は大きく三つ編みは長い
他動詞文： laowang(,) xia le yi zhi yanjing
Laowang blind PAST one CL eye
ラオワンは片目を失った・見えなくなった
（自動詞文： ta tiao dong de zin zang 所有標識 de が必要）
he move POSS heart
彼の心臓が動く

名詞的所有のように所有者 NP1 と所有物 NP2 が近接にある名詞句や，叙述的所有のように所有動詞により NP1 と NP2 が結び付けられる文では所有関係の解釈は推測しやすい。NP1 と NP2 が近接になく所有動詞もない構文，例えば外的所有において，その構文が表す意味の一部に所有関係を表す場合，NP1 と NP2 の間にはなにか特別な関係があるに違いないとみなすのが自然であろう。宮腰（2020: 120-121）は，外的所有に生起可能な NP1 と NP2 の間にはある程度の概念的近接性がなければならず，その程度は含意的階層（身体部位＞属性＞衣服/所持品＞有生物/親族＞無生物＞非所有）をなしており，身体部位が外的所有に一番表しやすいと主張する。

以下，子どもが身体部位を表す表現をどのように獲得するのかを考察し，身体部位の所有を表す形式の多様性のメカニズムを検討する。

3. 先行研究

子どもが身体部位を表す表現をどのように獲得するのかを扱った研究論文はほとんどないようである。身体部位語（a body part term: BPT）がいつ，どのように使われるのか，身体部位の所有を表す表現がいつ，どのように使われるのかに焦点を当て先行研究を整理し，分かった点と不明な点を明らかにする。

子どもが身体部位語をいつから理解したり発話したりするのかについては，Waugh and Brownell（2015）が保護者による報告を行った。それによると，英語児 1 歳 8 ヶ月の 33 人のうち 88%以上が理解し 33%以上が発話した語で，かつ 2 歳 6 か月の 31 人のうち 90%以

上が理解し 52%が発話した語は nose, mouth/lips, hair, tummy, ear, eye, hand, foot, head, toes（割合%の高い順）の 11 語である。

藤原 他（2006）の乳児担当の保育士による 377 名の日本語児(1;0)-(1;11)のチェックリストに基づき整理された年齢別高頻度語彙表（藤原 他 2006: 166）によると，1 歳台の身体部位語は，足，目，手，鼻，耳，口である（(1;0)は 1 歳 0 か月のことを示す）。岩淵・村石（1976）の 3 名の 1 歳から 5 歳までの日本語児の録音資料に基づいた調査では，幼児語として「あんよ」「おてて」「おめめ」が使われること，他に，足，手，目，口，鼻，頭，おなか，耳，指，髪，毛が発話されることが報告されている。

身体部位の所有表現をいつ，どのように使うのかに関しては，ドイツ語児の資料（7 人のドイツ語児(1;11)-(3;6)）を中心とし，他の言語の子どもの獲得研究結果（英語，日本語，ギリシャ語，ヘブライ語）に基づき名詞的所有，叙述的所有，外的所有を分析した Eisenbeiss et al.（2009）からわかることを整理する。Eisenbeiss らは発達順序を分析するのに，名詞句の発達に従いステージ 1（所有標識やその他の形態素標識と機能要素が使われないことが多く，使われる場合は決まりきった表現に限定される段階），ステージ 2（ステージ 1 より機能要素の使われる頻度が下がる段階），ステージ 3（機能要素の使われる頻度が増し，決まりきった表現での限定使用が減り，広範な述語や名詞と結びつきが増えだす段階），ステージ 4（必要な場合は機能要素を使用する段階）を設けた。

名詞的所有に関しては，身体部位の所有はステージ 3 から使われ始める。(7)の例文の(Annelie 2;4)は(子供名　その子供の年 ; ヶ月)である。

(7) mein nase läuft noch mehr. (Annelie 2;4)
my nose runs even more
‘My nose is running even more.’

叙述的所有では，所有動詞 haben ‘have’がステージ 1，2，3 から，sein’be’がステージ 3，4 から gehoren ’belong’がステージ 4 から見られるが，それらの動詞を使用し身体部位の所有がいつ，どのような表現で使われるかに関する発話例や指摘はなかった。

ドイツ語の外的所有に関しては，大人の文法では所有者に与格（Dative）が付与される。(8)では，その男性が犬の頭を洗うという意味の文において，犬に与格（DAT）が，頭に対格（ACC）が付与されている。

(8) Der Mann wäshcht dem Hund den Koph.
the-NOM man washes the-DAT dog the-ACC head
‘The man washes the dog’s head.’

日本語では(9a)のようにドイツ語に相当する文，所有者に与格を付与するような文は非文法的である。(9b)のような名詞句所有を含む文が使われる。

(9) a. *その男はその犬に頭を洗う。 b. その男はその犬の頭を洗う。

Eisenbeiss らが分析したドイツ語の子どものコーパスでは，外的所有がみられるのはごくまれであった。身体部位の所有を表した外的所有は 2 例がスタージ 4 で確認されている。提示されている例が(10)である。

(10) jetz hau ich dir aber aber ganz xxx den popo. (Svenja 3;2)
now hit I you-DAT PART PART really xxx the-ACC botty.
'Now I will really hit you on the botty.'

所有者が与格の目的語として，かつ名詞句所有内に所有代名詞として具現化される外的所有がごくわずか報告されている。(11)では洗う対象物である私の手に関して，与格 DAT が付与された所有者 mir と名詞句所有 meine hände が表されている。大人は，(8)のように所有者に与格が与えられると，所有物には対格が与えられる。

(11) mama du solls(t) mir jetz meine hände aber waschen. (Carsten 3;6)
mommy you shall me-DAT now my hands PART wash
'Mommy, you ought to wash my hands now.'

Eisenbeiss らは，ある動物が別の動物の耳または手を噛んでいる絵を使い，2 歳から 6 歳の，日本語児とドイツ語児合わせて 20 人を対象とした文の誘出（elicitation）調査を行った。ドイツ語児の年齢の高い子どもは，大人と同様，名詞的所有より外的所有を好んで使うが，大人と異なり名詞句所有を時々用いる場合があった。日本語児は，「キリンがウサギに耳を噛んでいる」のような所有者に与格「に」を用いる外的所有は全くみられず，一貫して「キリンがウサギの耳を噛んでいる」のような名詞句所有を使ったことを示した。

Table 2 は，4 つの発達段階に該当する子どもたちの発話ファイルの中に，名詞句所有（英語 his head に相当するドイツ語表現），名詞句所有を目的語に取ることができ，かつ外的所有にも使える動詞において，名詞句所有が他動詞構文にある文（I hit his head に相当するドイツ語表現），外的所有構文（I hit him on the head に相当するドイツ語表現）が何例観察されたかを，Eisenbess et al.（2009: 176, 193 の Table 3 と Table 6）を整理して表したものである。外的所有とは，(3, b2)で定義されたように，所有者 NP1 が動詞の項（主語や目的語）で所有物 NP2 が斜格（対格や与格など）を持つ名詞句を持つ文である。例え

ば, A woman holds out the hair she has cut off.（*TIME* Oct.24/31, 2022）の場合, the hair は女性の一部だったがその髪を切って手に持ち, 髪はその女性から離れた物質として捉えられた表現であるが, この文も所有者 a woman が主語にあり, the hair は前置詞から対格が付与されていると考えるとすると外的所有の一種と考えられる。その文と Table 2 の文（I hit him on the head）を区別するために, 本論文では, ある事態において意味的には一つのまとまった要素を統語的にも名詞句所有として表すことが可能なものを, 統語的に独立した二つの構成素（him, the head）によって表す構文を外的所有構文と呼ぶことにする。- は観察されなかったこと, 数字は発話例の数, グレー網掛けは複数の子どもが複数回発話している段階を示す。

Table 2　身体部位の所有表現の種類と発達過程（Eisenbeiss et al. 2009: 176, 193）

	名詞句所有（例: his head）	名詞句所有が他動詞構文にある文（例: I hit his head）	外的所有構文（例: I hit him on the head）
ステージ 1 Ann 他 3 名	-	-	-
ステージ 2 Ann 他 3 名	-	-	-
ステージ 3　And	5	2	-
Ann	5	-	-
Han	-	-	-
Leo	2	-	-
Mat	-	-	-
ステージ 4　Ann	2	1	-
Car	11	4	-
Han	-	-	-
Leo	3	1	1
Mat	3	1	-
Sve	16	7	1

以上から，わかった点と不明な点を整理すると(12)(13)のようになる。

(12)わかった点

a. 身体部位語について，英語児は, nose, mouth/lips, hair, tummy, ear, eye, hand, foot, head, toes を 3 歳までに理解かつ発話できる確率が高い。日本語児は，1 歳から 5 歳までに幼児語（あんよ，おてて，おめめ）を使う場合があり，足，手，口，目，鼻，頭，おなか，耳，指，髪，毛の発話ができそうである。英語児でも日本語児でも早く使えるような身体部位語

は，鼻，口，髪，おなか，耳，目，手，足，頭である。

b. ドイツ語児は，機能要素の使われる頻度が増し，広範な述語や名詞との結び付きが増え出す段階から名詞句所有を使い始め，その次の段階（必要な場合は機能語が使われる段階）に名詞的所有が他動詞構文にある文を使い，その段階と同時またはその後に，外的所有を使う傾向がある。

c. 日本語児は，ドイツ語に相当する外的所有構文は使わず，名詞的所有を含む文を用いる。

(13)不明な点

身体部位語がいつごろから使われ始め，いつ，どのような語と結び付き，いつ大人と同様の表現が使われるようになるのか，全体的な発達過程が明らかでない。具体的には，

a. 身体部位語単独で使われる場合はあるのか。

b. 所有動詞が使われた文で身体部位の所有は表されるのか。

c. ドイツ語児の傾向(12b)は，形態的類型が同じ屈折言語，例えば英語児でも同じ傾向であるのか。

d. 日本語では，ドイツ語でみられる外的所有構文とは異なる表現はいつ，どのように使われるのか。

4. 身体部位表現の発達過程

上記で示した(13)の不明な点を明らかにするために，英語児 1 人と日本児 1 人の発話資料に基づき，英語では nose, mouth, lips, hair, tummy, ear, eye, hand, foot, head, toes，日本語では，手，おてて，（お）鼻，（お）耳，（お）口，目，おめめ，足，あんよ，頭，髪，（お）指，おなか，の使い方を考察する。

本論文では，口頭言語のデータベース CHILDES（チャイルズ，Child Language Data Exchange System）から英語児 1 人と日本語児 1 人の発話データを CLAN（Computerized Language Analysis） プログラムの KWAL（Key Word and Line） コマンドで特定の単語を探し分析した（MacWhinney2000，宮田 編 2004）。英語児は MacWhinney（2000）の息子 R 児のデータ(1;4-8;0)のデータ，日本語児は野地（1973-1977）の息子 S 児(0;0-6;11)のデータである。

発話データを分析するために，CHILDES の一部である CLAN（Computerized Language Analysis）というデータ分析プログラムを使用する。CLAN プログラムの KWAL コマンドで，特定の単語を探し，それを含む文の一覧表を作成する。使用したコマンドは，例えば(14)のようなものである。

(14) a. KWAL+t*CHI+s”head”+w2-w2+f@

b. KWAL+t*SUM+s”atama”+o%ort+w2-w2+f@

(14a)で使われたオプションの機能は，+t オプションは発話者（Ross;CHI）を指定し，+s はキーワード head を指定し，+w2–w2 はキーワードを含む発話の前後の発話 2 文を表示させ，+f は検索結果ファイルを保存し，@は指定されたファイルを検索する機能である。(14b)で使われたオプションの機能は，+t オプションは発話者（S 児；SUM）を指定し，+s はキーワード「あたま」を指定し，+o は発話ライン（メインライン）に付属するディペンデントテア， %ort は仮名漢字で入力された発話が表示される。

日本語児のデータには，「お指」「あんよ」の発話がなかった。

4.1 身体部位語の発達

成人文法での身体部位語が使われるときの名詞句の内部構造を表した主な例は，英語では(15)，日本語では(16)のようになる。非文法的表現は，英語も日本語も所有者に所有格語尾がつかない場合と英語の可算名詞がその語だけで使われる裸名詞の場合である。(15)にある(　　)には補足情報を記載する。

(15) a. 可算名詞の hand: a/one hand, the/Mary’s hand(s), two/both/no/many hands (*hand, *you/Mary hand)

b. 不可算名詞の hair: hair, the/Mary’s/your hair, no/much hair　(*you/Mary hair)

(16) 手，｛１つ/メアリ/たくさん/両方/そ｝(*)の手，手１つ　＃ (*)の: のを省略は非文法的

英語児の場合，(17)のように身体部位語が発話され始める 2 歳 5 ヵ月から，所有者 NP1’s または所有代名詞と所有物 NP2（身体部位語）の名詞句で見られた。

(17) a. I’m going to pull Marky’s hair (2;5) , that your hair (2;6)

b. he’s thinking [//] going over it in his head (2;5), you bump my head (2;6)

c. my tummy hurts (2;5), hit on my tummy (2;6)

(18)のように 2 歳 10 ヵ月以降に the と身体部位語からなる名詞句も見られ始めた。

(18) a. The doctor say that I got hurt on the hand hurt on the merry-go-round and on the swing (2;10) b. he put his hand in the boiling in the hot water and then you took me to preschool. (2;11)

(19) a. (父：How come it keeps coming undone?) it wasn’t me. ①it was the foot. (2;11) ②it was my foot. (2;11)

b. a rat crawled on the foot and he let go of that big man. (4;8)　（テレビ番組の話：ねずみはその足を這った。）

c. What has a mouth and teeth and a foot and no eyes? (5;3)

d. no. that's the foot that hurts. (5;5)　（痛いのはその足だ，自分の足のこと）

(18a)のように，「医者は自分は手にけがしたと言った」という内容において，自分の手を my hand ではなく the hand が使用された。同じ時期に(18b)のように his hand が使われた。(19a)は父の質問である「なぜ靴紐が何度もほどけるんだ？」に対して，まず自分のせいではないことを言い，自分の足のせいだと，①②のように the foot も my foot も両方の表現が使用された。(19c)では a foot が表現された。

S 児の名詞句の表現と使い始めた時期を整理すると(20)のようになる。

(20) a. NP1's hair (2;5) the hair (3;8)

b. NP1's tummy (2;5) the tummy (4;8)

c. NP1's head (2;5)　the/a head (4;3)

d. NP1's mouth (2;10) the mouth (3;7)

e. NP1's lips (4;11)

f. the/NP1's foot (2;11) a foot (5;3)

g. NP1's nose (3;0)　a nose(3;7)　no nose (3;11)

h. NP1's eye (2;10) the eye (3;6)　a eye (4;5)　no eye (5;11)

i. the hand (2;10) NP1's hand (2;11) one hand (3;7)

j. the ear (3;3) an ear(5;4)

身体部位語が使われ始めたとき，その語を含む名詞句の内部構造は，身体部位語 BPT だけの名詞句としては使われることがない。所有名詞句が(2;5)から使われ始め，the BPT が(2;11)から，a/one BPT が(3;7)から，　no BPT が(3;11)も使用されるようになる。

上記にまとめることができなかった発話例 4 つを挙げると，一つは，身体部位の名前を当てるというゲームのような使用域が限られる場合は，(21)のような発話であった。

(21)（絵本を見ながら父：What's this?）　a. dirty mouth (2;5)　b. tummy (2;5)

二つ目は，名詞的所有や外的所有構文を大人であれば使用するところを(22)のように hurt him foot, hit you tummy というように動詞から影響を受ける対象者を先に述べ，次に影響を受ける部分を述べている。

(22) a. He hurt him foot (2;6) 父：He hurt his foot 言い直す　a’ He hurt him foot (2;6)

b. I’m gonna hit you [:your] tummy (2;6)

(22)の時期以前に hit や hurt を含む文 I wanna hit Mark(2;5), you might hurt him(2;5) I might hurt Mike?(2;5)が使われ始めた。動詞の使い方（hurt の場合は hurt his foot, hurt him, hit の場合は hit your tummy, hit you on the tummy, hit you）が定着していなかったという可能性がある。

日本語児の場合, (1;8)から身体部位語だけが使われ始め, (2;2)から所有名詞句も使われる。(23)はみみを含む発話例, (24)はおててを含む発話例である。

(23) a. みみ(1;8) （両親が耳鼻科の話をしていて，「みみ」と母に言い，ついで自分の耳，おもちゃの犬の耳を指す）

b. みみ はいるよ(2;2)（母と S 児と妹がいて，妹の入浴，母が妹の髪を洗うといった後の発言，妹の耳にお湯が入るよ）

c. ぼくのみみばばがある(2;3) （僕の耳に汚いものがある）

(24) a. かあちゃん　おてて(1;10) （母の手をさしてこのように言う）

b. おてて　ちゅないで(2;0) （母に手をつないでと言う）

c. ぼくここでおててあらおうか(2;4)

d. のみがこんなにおててかまれたんでー(2;5)（S 児がのみに噛まれたのを思い出して）

e. つめたいよ　おかあちゃんのおてては(2;6)

日本語児の名詞句の表現と，使い始めた時期を整理すると(25)のようになる。

(25) a. みみ(1;8), おみみ(2;5) NP1 のみみ(2;3)

b. おてて(1;10), NP1 のおてて(2;6), て(3;4), 左の手(3;9), 一本の手(3;10), この手(3;11), NP1 のて(4;5)

c. おおきいおあち(2;1), おあち(2;2), NP1 のあち(2;2), 一本の足(3;10), この足(5;4)

d. おめめ(2;1), め(2;4), NP1 のおめめ(2;7), あおいめ(2;7)

e. おなか(2;1), このおなか(2;6), NP1 のおなか(2;8)

f. くち(2;2), おくち(2;5), NP1 のおくち(3;3)

g. あたま(2;2), NP1 のあたま(3;10)

h. はな(2;3), おはな(3;1)

i. ゆび(2;7), このゆび(4;7)

j. かみ(5;3)

身体部位語が使われ始めたとき，その語を含む名詞句の内部構造は，身体部位語 BPT だけ(1;8)から使われ始め，所有名詞句(2;2)，[おおきい BPT] (2;1)，[あおい BPT] (2;7)，[この BPT](2;6)，[左の BPT](3;9)も使用されるようになる。

[この BPT]を含む発話文は(26)である。「このおなか」や「この指」の「この」は指示詞である。(26a)のおなかの所有者はぼくである。(26b)の「このゆびたかれ」は「このゆびとまれ」の S 児流表現だろう。

(26) a. ぼく　このおなか　みてごらん(2;6)
b. ばすごっこするもん　このゆび　たかれ(2;7),
c. かくれんぼするもん　このゆび　たかれえ(4;7)

4.2　所有動詞と身体部位語を含む文の発達

所有動詞と身体部位語が使われている文では，通例，文中に所有者が表現される。英語では所有動詞として have が使われ，事情がないかぎり所有者には身体部位が存在する。(2c)は人間の描写説明であり，普段の会話では，(27)のようにその身体部位の特徴が加わった発話がされる。

(2c) Humans have legs and arms.　　(27) I have {dark/no} hair.

日本語では，所有動詞として「持つ・持っている」「ある」「～をしている」があり，(28)のように使われる。英語の場合と同様，(28a)(28b)は人間の描写説明であり，普段の会話では，(28c)(28d)のように身体部位の特徴が加わった発話がされる。

(28) a. 人間には手足がある。b. 人間は長い手足を持つ。c. 太郎には大きい目がある。
d. 太郎はいつも長い髪をしている。

英語児が所有動詞を含む所有文として発話した例文は(29)である。

(29) a. my mouth has a tongue and you got a tongue (3;1)
b. he had dirty hair (3;3)
c. Rudolf the red nose reindeer (:)had a very shiny nose.(3;7)
d. She doesn’t have sexy hair like her (3;10)
e. He has black hair (4;8)
f. (F: how does Luke’s look?) &hi his has the tummy(.) or something. (4;8)
g. What has a mouth and teeth and a foot and no eyes? (5;3)

h. well(.) yeah(.) but one doesn't have a mouth (5;4)

i. What dog has no eye no nose and no fur (5;11)

j. somebody that has a head that's red (6;4)

(29)では所有動詞 have が使われ, (29a, g)のように所有者と身体部位の所有が説明されたり, (29b, c, d, e, f, h, i, j)のように身体部位の特徴やそれが存在しないことも表現されたりした。

日本語児による発話例は(30)である。

(30) a. おかあちゃん　ちょうちょ　おてて　ある？(3;3)

b. てるきちゃんはおみみがない(3;5)

c. ちゅんちゅんおててがないんじゃね(3;8)　（ちゅんちゅんはすずめ）

d. でんでんむしはどこであるくんかね　あしがないのに(6;4)

e. あしもはえてないのにね　しっぽだけあるのとったよ(6;5)

f. かみなりはくちがないのにどうしておとをだすん？(6;4)

所有動詞として(30a)(30e)は「ある」, その他の例は形容詞「ない」が使われている。その他の例では, 所有者になる生物には身体部位がありそうだけれど持っていないということが表現されている。所有動詞としての「持つ」「持っている」は観察されなかった。

所有動詞を含む所有文として, 英語では(3;3)から[主語＋have＋[属性形容詞+BPT]]の形式が使われ, 日本語では, (3;3)から [主語＋名詞＋{ある/ない}]の形式が使われた。

4.3　英語児の外的所有構文の発達

英語では, (31)(32a)のように「トムが私の手を打った」という事態を 2 通りの形式で表すことができ, 本論文では(31)のような形式を名詞的所有が他動詞構文にある文, (31)では意味的にも形式的にもまとまりである要素 my hand が, (32a)では独立した 2 つの要素（me, the hand）によって表す(32a)のような形式 [NP V NP1 on/in the NP2] を外的所有構文と呼ぶ。

外的所有構文の主要な特徴は動詞の意味が重要な役割を果たし, なんらかの意味で「接触」を表す動詞に限定される。(32a)の hit のように動詞の意味が接触を表すもの, (32b)のように pull の引っ張る接触部 by the coat を明示的に表現することで接触を表すようになるもの, (32c)のように in the face という特定の場所を表現し, 比喩的な意味で接触を表すようになるものがある。

(31) Tom hit my hand.

(32) a. Tom hit me on the hand.　b. The dog pulled him by the coat.

c. He looked me straight in the face.

英語児は，外的所有構文に(33)のような動詞を用いた。これらの動詞は，接触動詞（contact verbs）の仲間である。

(33) touch (3;3), poke (3;6), tickle (3;7), hit (4;4)(4;8)(6;7), knock (5;7)

(34)のような文を発話した。nose, lips, hair, foot が使われた発話文はなかった。3 歳 3 か月から外的所有構文がみられた。

(34) a. the ear: because that doctor touched me in the ear (3;3)

b. the eye: because Marky poked him in the eye (3;6)

c. the mouth: they will tickle me in the mouth (3;7)

d. the head: I will hit him on the head (4;4), (F: and what did they do with those big thick sticks?) well they know things over(.) knock people on the head with (5;7), once a door form the bath+room came shooting open and hit me in the head. (6;7)

e. the tummy: when you hit a person in the tummy(.) that's not bad(.) you know why? (4;8)

(31)(32a)でみたように, (34)と同じような事態を名詞的所有のある他動詞構文でも表現可能である。接触動詞が名詞的所有を目的語として使用している発話例は(35)である。

(35) a. one's eye: don't poke your eye (2;10), but that might poke your eye (2;10) and I think maybe I should poke my eye into my fingers (3;10)

b. one's head: you bump my head (2;6), my tigers are going to snap down my head and I'm going to put them in the cage (2;10), and and then when he starts to go and he cracks his head (3;11)

c. one's tummy: hit on my tummy (2;6)

d. one's nose: then Pac Man is mad because gorilla bit his nose (5;4)　（Pac Man の鼻）

e. one's hair: I'm going to pull Marky's hair (2;5)　（pull him by the hair はデータなし）

f. one's hand: I like you holding my hand (3;7)　（hold him by the hand はデータなし）

(36)は名詞的所有のある他動詞構文で使われた動詞である。

(36) bump (2;6), hit on (2;6), pull (2;5), snap down (2;10), poke (2;10)(2;10)(3;10), hold (3;7),

crack (3;11)

(33)(36)を比較すると，使われた動詞は接触動詞の仲間である。名詞的所有のある他動詞構文にも外的所有構文にも使われた動詞は poke であり，前者の構文で早く使われた。

二つの構文においていつ身体部位語が使われ始めたかを考察すると Table 3 のようになる。

Table 3 構文内で身体部位語の使われ始めた年齢

	名詞的所有のある他動詞構文	外的所有構文
hair	2;5	なし
head	2;6	4;4
tummy	2;6	4;8
mouth	なし	3;7
ear	なし	3;3
eye	2;10	3;6
hand	2;11	なし
foot	2;11	なし

Table 3 によると，名詞的所有のある他動詞構文と外的所有構文の両方で発話がみられた head, tummy, eye によると，名詞的所有のある他動詞構文のほうが 2 歳半から使われ，外的所有構文が 3 歳半から使われている。身体部位語全体からみても，名詞的所有のある他動詞構文のほうが 2 歳 5 ヵ月から使われ，外的所有構文が 3 歳 3 か月から使われている。

英語児の発達過程をまとめると，修飾語のない身体所有語 BPT は使われない。1) 名詞的所有 NP1's BPT(2;5)と名詞的所有のある他動詞構文が(2;5), 2) the BPT(2;11), 3) 所有動詞を含む文(3;3)と外的所有構文(3;3)の順で使われることが分かった。

ドイツ語児の発達傾向は，機能要素の使われる頻度が増し，広範な述語や名詞との結び付きが増え出す段階から名詞的所有が使われ始め，その次の段階（必要な場合は機能語が使われる段階）に名詞的所有が他動詞構文にある文が使われ，その段階と同時またはその後に，外的所有が使われるというものであった。ドイツ語児の発達過程と比較すると，ドイツ語児も英語児も最後に使われ出すのが外的所有構文である。相違点は所有名詞句 NP's BPT(2;5)と名詞的所有のある他動詞構文が，同時期に使われ出すのか，順序があるのかという点である。

4.4 日本語児のその他の身体部位の所有表現

日本語には，ドイツ語や英語のような外的所有構文がないが，所有者と所有物を異なった構成素で表す文，一つの文を超えて所有関係を表す形式がある。その具体例が(37)である。

(37) a. 経験者が主語の他動詞文：太郎が（事故で）足を折った。
b. 所有受動構文：太郎は次郎に顔を殴られる。
c. 二重主語構文：c1) 自動詞文：太郎は顔が腫れた。
c2) 属性形容詞文：私はおなかが大きい。
c3) 感情形容詞文：私はおなかが痛い。

(37a)では太郎は足を折ってしまった経験者であり，足を折った動作主ではない。所有者の太郎が主語，所有物の足が目的語にある。(37b)と(37c)が一つの文を超え，その文に話題の所有者が付与された文である。話題に所有者があり主語に身体部位語がある文である。

(38)～(40)は「おなか」「あし」「おめめ」が使われた発話例である。その他の身体部位語では見られなかった。

(38)「おなか」を含む発話例

a. ぼくおなかすいちゃったよ(2;4)　　b. こっこちゃんおなかおおきい？(2;4)
c. てるきくんもうおなかなおった？(2;9)（母に尋ねる）
d. ぼくおなかすいたけんあめたべよう(3;0)
e. おかあちゃん　ぼくもうおなかすいたけんごはんたきんさい(3;0)
f. ぼくおふねのったときたべたけんおなかすかん(3;0)
g. おかあちゃん　こうじくんがおなかいたいのと(3;1)
h. ちょうちょがもうおなかすいたーいうてーかえってはっぱにとまってごはんたえるんよ(3;3)
i. ぼくおなかすかんじゃ(4;11)　　j. ぼくらおなかすいたんじゃ(5;2)

(39)「あし」を含む発話例

かあちゃん　ぼくあしきれいなよう(5:0)

(40)「おめめ」を含む発話例

a. おかあちゃん　おにいちゃんおめめさめたよ(2;4)
b. わんわんおめめがいたいんよ(2;10)　c. てるききんおめめさめた？(2;11)（母に尋ねる）
d. ぼくもおめめさめたんよ(2;11)　e. おかあちゃん　てるきちゃんがおめめさめてるよ(3;0)
f. てるきちゃんがおめめさめたら　ほしいよーいうよ(3;6)　　（ほしいものは牛乳）

使われた形式は限定的であった。2 歳 4 ヵ月から二重主語構文の自動詞文と属性形容詞文, 2 歳 10 ヵ月から感情形容詞文の発話例が見られた。二重主語構文では, 述部が「おなかがすく」「おながががなおる」「めがさめる」が用いられ, 属性形容詞は「おおきい」「きれい」, 感情形容詞は「いたい」が使われた。6 歳までの資料に経験者が主語の他動詞文, 所有受動文はみられなかった。

日本語児の発達過程は, 身体部位語 BPT だけの名詞句が(1;8)から使われ始め, 次に名詞的所有(2;2)が使われるようになり, その後二重主語構文(2;4), 所有動詞を含む文(3;3)が使用されるようになる。6 歳までの資料に他動詞文, 所有受動文はみられなかった。

英語児の発達過程と比較すると, 名詞的所有は 2 歳前半から, 所有動詞を含む文は 3 歳前半から使い始めるのは共通している。相違点は, 身体部位語が使われ始めるときは, 英語児は名詞的所有で, 日本語児はその語だけの名詞句使用である。名詞的所有や叙述的所有以外の形式については, 日本語児の二重主語構文が 2 歳前半, 英語の外的所有が 3 歳前半から使われ始めた。日本語児の資料にみられないものとしては, 経験者が主語の他動詞文と所有受動構文であった。

(13)の不明な点に対して明らかになったことは(41)のようにまとめられる。

(41) a. 「所有物の身体部位語単独で使われる場合はあるのか」に対して, 身体部位語が使われ始めたとき, その語を含む名詞句の内部構造は, 英語では, その語 BPT だけの名詞句としては使われることがなく, 所有名詞句 NP1's BPT(2;5)が使われ始め, the BPT(2;11)も使用されるようになる。日本語では, BPT(1;8)単独が使われ始め, 単独語と共に所有名詞句 NP1's BPT(2;2)も使用されるようになる。

b. 「所有動詞が使われた文で身体部位の所有は表されるのか」に対して, 英語では, [主語 ＋have＋[属性形容詞+BPT]]で, 日本語では, [主語＋BPT＋ある/ない]という形式で(3;3)から使用される。所有動詞の「持つ」「持っている」は観察されなかった。

c. 「ドイツ語児の傾向(12b)は, 形態的類型が同じ屈折言語, 例えば英語児でも同じ傾向であるのか」に対して, 英語では, 名詞的所有(2;5)と接触動詞の他動詞文(2;5)が使われ始め外的所有構文(3;3)も使用されるようになる。ドイツ語も英語も最後に使われ出すのが外的所有構文である。相違点は所有名詞句と接触動詞の他動詞構文の使用順序に違いがみられた。

d. 「日本語では, ドイツ語でみられる外的所有構文とは異なる表現はいつ, どのように使われるのか」に関しては, 異なる表現として日本語には, 述語の経験者が主語で ある他動詞文, 所有受動文, 二重主語構文（自動詞文, 感情形容詞文, 属性形容詞文） があるが, その一部である二重主語構文の自動詞文(2;4)と属性形容詞文が

(2;4), 感情形容詞文が(2;10)から使われる。日本語児の発達過程は，BPT(1;8)単独の名詞句が使われ始め，単独の名詞句とともに名詞的所有(2;2)も使われるようになり，その後二重主語構文(2;4)が使用されるようになる。6 歳までの資料には経験者が主語の他動詞文，所有受動文はみられなかった。

5. 考察

言語発達の最終形が言語間変異でみられる現象である。子どもの言語発達過程を捉える理論は，言語間変異を説明する理論となりうる。生成文法理論（Chomsky 1981; 1986 等）の枠組みで言語獲得モデルを Fig. 1 のように仮定し， 5 節では，子どもが母語の特定の特性を特定の時期に特定の順序で獲得するのはなぜかという問いに対する答えを探求し，なぜ英語には外的所有があり二重主語構文がないのか，日本語はその逆なのかという言語間変異に対して理論的に説明することを試みる。

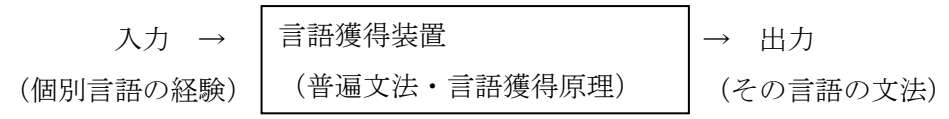

Fig. 1　生成文法の枠組みでの言語獲得モデル

4 節の身体部位語表現の発達過程の考察から，英語児の発達過程は(42)であり，日本語児の発達過程は(43)である。

(42)英語児の身体部位語表現の発達過程

NP1's BPT, S+Vcontact+NP's BPT(2;5), the BPT(2;11), S+have+[属性形容詞+BPT], S+Vcontact +NP1 +in/on the BPT(3;3), a BPT(3;7)

(43)日本語児の身体部位語表現の発達過程

BPT(1;8), NP1 の BPT(2;2), 二重主語構文の自動詞文と属性形容詞文(2;4), この BTS(2;6), 二重主語構文の感情形容詞文(2;10), S+BPT+ある／ない(3;3) （(6;11)までに所有動詞「持つ」「持っている」を含む文，経験者が主語の他動詞文，所有受動文は観察されなかった）

(42)と(43)を名詞句の発達と文の発達という観点で分類すると，(44)(45)のようになる。

(44)英語児

a. 名詞句の発達: NP's BPT(2;5), the BPT(2;11), a BPT(3;7) #this BPT は観察されなかった。

b. 文の発達: b1. S+have+[属性形容詞+BPT] (3;3)

b2. i) S+Vcontact+NP's BPT (2;5), ii) S+Vcontact +NP1 +in/on the BPT(3;3)

(45)日本語児

a. 名詞句の発達: BPT(1;8) , NP の BPT(2;2), この BPT(2;6)

b. 文の発達: 二重主語構文の S+BPT+自動詞文(2;4)/ 属性形容詞文(2;4)/ 感情形容詞文(2;10), S+BPT+ある/なし(3;3)

(44a)と(45a)にみられる名詞句の発達に影響を及ぼす主な要因は，1) 概念と形式の対応に関する複雑性（関係概念をそのまま表す形式が早く使われる）と 2) 言語の類型（Li & Thompson 1976 ; Masuoka 2017）に基づき日本語の主題卓越型言語（「主題―解説」を文構造の基盤とする言語）の特徴が言語発達の早期に獲得されることにあると考えられる。

主題卓越型言語（topic-prominent languages）とこれから言及する主語卓越型言語（subject-prominent languages）について概観する。主題卓越型言語は，動詞が文末にある言語に多く，例えば日本語，韓国語，中国語などである。主題とは，その文が述べる内容の主要な題目のことで，最も重要な情報である。主題は文頭に，次に解説が述べられ[主題(topic)-解説（comment）]という文構造を持つ。主題と主語は同じでないことが多い。主語とは，文中の行為者のことである。

主語卓越型言語とは，主語が文頭にある言語が多く，例えば英語，フランス語である。主語が最も重要な情報であり，[主語―述語]という文構造を持つ。主語と主題が同じことが多い。主題卓越文を作ることも可能である。as for, regarding などの表現（e.g., As for me, I don't like bananas. 下線が主題）や受動文・前置文・分裂文（強調構文）（e.g., Bananas, I like. It's bananas that I like.）という構造的再配列を利用して主題を明示的にすることができる。

主語卓越型言語と比較すると，主題卓越型言語は以下のような特徴が見られる。一つめに，話題を示すための形態素がある。日本語の場合は助詞「は」である。二つめに，もうすでに文中で述べていることに言及するとき同一指示語（e.g., it） を使わないことが多い。また虚辞主語（e.g., it, there）はみられない。三つめに受動態を避ける傾向があり，不都合な悲観的な出来事の時のみ受動態の使用が見られる。受動文は主語卓越型言語では，主語の行為者と目的語のその行為を受ける人（物）を入れ替えることで生成される。主題卓越言語では受動者を文頭に置き主題の役割を持たせればよいことになり，受動文で表す必要はない。

英語児の名詞句の発達過程では，BPT の概念が独立したものではなく「誰かの手」のように関係概念であることを知覚的にまず獲得する。周囲の人々の言語表現から，子どもが獲得する早期の BPT は関係名詞の特徴を示すことを獲得し，関係概念をそのまま表す NP's BPT が最初に使われる。名詞句の限定表現を獲得するにつれ，the BPT が次に使われるようになり，典型的概念から外れた「独立した物」として表す表現 a BPT も使われるよ

うになる。this BPT が観察されなかったのは, NP's BPT が指示機能も持つためであると考えられる。

日本語児は, 英語児と同様, BPT の概念が独立したものではなく「誰かの手」のように関係概念であることを知覚的にまず獲得する。日本語の場合は, 少人数の会話中では, 呼びかけが使われたり, 主題卓越型言語に特徴的な話題が提供されたりして, BPT という部分の名前を言えば, その BPT という部分の全体である所有者は, 文脈から推測可能であり, わざわざ言う必要がない。主題卓越型言語の特徴が影響し, 不定表現のゼロ形である BPT がまず使われるようになる。その後, 必要な場合に定表現の [NP の BPT] が使われるようになる。所有者が文脈でわかっており, その物またはその場所を指し示したい場合に [この BPT] が使われる。

(44b)と(45b)にみられる文の発達に影響を与える主要な要因は, 1）言語の類型に基づいた英語の主語卓越型言語の特徴と日本語の主題卓越型言語の特徴が言語発達の早期に獲得されることと 2）概念と形式の対応に関する複雑性（概念のまとまりを別々に表すよりもまとまった形で表すほうが早く使われる）, 3）概念/統語構造の基本と派生の関係（基本的な表現が派生的な表現より早く使われる）にあると考えられる。

英語児は, S+have+[属性形容詞+BPT] (3;3)より先に, 動作動詞 have を含む文は I have a gun too (Mark 2;5)のように 2 歳から, 状態動詞の have に関しては, We have Pepsi (Mark 3;0)（松藤 2016）のように人と身の回りのものの短期の近接関係が表された。動作動詞 have の文は, 主語－述語を文構造の基盤とする主語卓越型言語の特徴を示す。状態動詞 have の文の主語は, 一時的に身の回りの物が近接にある単なる場所であるとともに, 動作動詞 have の文にみられる主語卓越型言語の特徴が影響して, 物や事に影響を受ける所有者になると考えられる。子どもは BPT が示す部位は所有者主語のところにいつもあることを認識しているため, BPT に属性形容詞を付与することにより, 語用論上会話を成り立たせるために, 近接関係以上の情報を伝える表現を獲得する。

(44 b2) の発達は二種類の説明が可能である。一つめは, Eisenbeiss et. al.（2009:153-154）の指摘のように, 両者(i, ii)の形式の共通点は, Agent と Patient, 所有関係（Patient とその BPT）が表される。早く獲得される形式(i) [S+Vcontact+NP's BPT] は Agent+Patient が文で表され, Patient には所有関係を表す名詞句 [NP's BPT] で表現される。次に獲得される形式(ii) [S+Vcontact +NP1+in/on the BPT] も Agent+Patient が文で表されるが, 所有関係が動詞の目的語 NP1 と前置詞の目的語 [the BPT]で表される。この両者は概念構造から統語構造への写像の仕方が異なる。このことが, 概念と形式の対応に関する複雑性に影響を与える。概念のまとまりを表す場合, 別々の場所で表すより, まとまった形で表す方が早く獲得される。

もう一つの方法は, 基本と派生の関係が影響し, 基本的な表現が派生的な表現より早く使われるという説明である。(46a)(46b)を生成するため, 接触を表す動詞の基本的な概念

構造と統語構造(47)が先に獲得され，同時またはその後に，(46c)のような場所も表された，より複雑な出来事の表現の統語構造(48)を put などの動詞で獲得すると，その後，接触を表す動詞の派生的な概念構造(49)が獲得され，(46d)のような表現ができるようになると考えられる。概念構造は Jakendoff（1990）に基づいた記述である。

(46) a. I wanna hit Mark (2;5)　　b. you bump my head (2;6)
c. put milk in it (2;5), he put it on my leg (2;6)　d. I will hit him on the head (4;4)

(47) FORM: NP1 [$_{VP}$ V NP2]
MEANING: [CS ([I] , [INCH ([BEc ([HAND] ,[ATc ([MARK/HIS HEAD])])])
AFF ([I], [MARK/HIS HEAD])]

(48) NP1 [$_{VP}$ V NP2 [$_{PP}$ P NP3]

(49) MEANING: [CS ([I] , [INCH ([BEc ([HAND] , [ATc ([HIM]) [ON([HEAD OF (HIM)])]])])])]
AFF ([I], [HIM])

(22) a. He hurt him foot (2;6) 父：He hurt his foot 言い直す　a’ He hurt him foot (2;6)
b. I’m gonna hit you [:your] tummy (2;6)

4.1 節でみた(22)の言語現象は，接触を表す動詞の派生的な概念構造(49)を獲得できていない段階の表現であり，接触を受ける相手とその場所を並列した[名詞＋名詞]で表した表現だといえる。

日本語児でみられた文(45b) の全ての形式は，[主題―解説]の文構造を基盤としていると考えられる。主題に関して，解説で使われている表現は，「おなかすく」「おなかなおった」「おなかおおきい」「おめめがいたい」であり，生活に密着した頻繁に使用される表現である。[S+BPT+ある/なし]の表現が遅く発話されるのは，ただ BPT が示す部位の有無を伝えているのではなく，自分を含めヒトと生物の BPT と比較し存在しているだろうけれど，本当にそうかどうかを表現しているためであろう。所有者につく「には」が使われるのは遅い。（5 歳 9 ヵ月から使われる）（松藤 2018）。格助詞の「に」は多義であり，その中の一つ「所有の対象」として使われるのには時間を要する。

6 歳 11 ヵ月までの発話資料には BPT を「持っている」の所有文は観察されなかった。「持っている」は携帯するという動作動詞の意味で使われ始める（松藤 2015）。「持っている」という形式を永久的な所有の意味に結び付けるには時間がかかるようである。

[NP1 が/は NP2 を持っている]という形式において，NP1 と NP2 のそれぞれの意味内容と所有関係（非典型的から典型的なものまで）が使えるようになると Myler（2016）の所有文の分析のように，大人と同じく動詞「持っている」の実質的な意味がなくなるように考えられる（松藤 2018）。経験者が主語の他動詞文，所有受動文が発話資料には観察されず遅く使用されるだろうと考えられるのは，出来事を表すとき，基本的な要素を持つ文（動作主が主語の他動詞文，受動文）が先に表されるようになり，派生的な文が遅く表されるようになるためであろう。

成人になるまでに英語では主題を明示する文（e.g., 有標的な構造で使用頻度の少ない文 My sister, she's a high school teacher. 益岡 2020），日本語では主語述語文（e.g., 親が子どもを軽々と抱き上げた）を使用するようになるが，所有の意味を英語話者が二重主語構文で，日本語話者が外的所有構文で通常表すようになることはない。子どもの母語となる言語の主語卓越言語の特徴，または主題卓越言語の特徴の早期の獲得がその後の発達に影響を与えることとなる。

6. まとめ

本論文では，所有を表す広範囲な意味の中で「人の身体部位の所有」に焦点を当て，それが表す形式の発達過程に関する実証的資料を検討し，所有の言語化に関わる普遍的な原理ついて考察した。その結果，英語児は主語卓越型言語の特徴を，日本語児は主題卓越型言語の特徴を言語発達の早期に獲得することから，その特徴と複雑性の法則が影響して，英語には外的所有構文があり二重主語構文がみられず，日本語には，二重主語構文があり，外的所有構文がみられないという結果が生じると議論した。生成文法理論の枠組みで言語獲得モデルを仮定し，言語獲得理論に，主題卓越パラメータ（Baker 2001:182-184）や複雑性（概念と形式の対応関係，概念/統語構造の基本と派生の関係）を捉える法則があれば，身体部位表現の言語間変異と発達過程が説明可能であることを主張した。

*本研究は令和 2－5 年度 JSPS 科研費基盤研究（C）「所有の概念・表現とその発達」（課題番号 20K00686 研究者代表　松藤薫子）の助成を受けた研究成果の一部である。

本論文は日本言語学会第 167 回大会でのポスター発表（「身体部位の所有表現の形式の多様性とその表現の発達」（2023 年 11 月 11 日））の内容に加筆修正を加えたものである。

引用文献

Aikhenvald, A. Y. (2013). Possession and Ownership: A Cross-linguistic Perspective. In A. Y. Aikhenvald & R. M. W. Dixson (eds.), *Possession and Ownership: A Cross-linguistic Typology* (pp. 1-64). Oxford University Press.

Baker, M. C. (2001). *The Atoms of Language: The Mind's Hidden Rules of Grammar.* Basic Books.

Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Fois.

Chomsky, N. (1986). *Knowledge of Language: Its nature, origin, and use*. Praeger.

Eisenbeiss, S., Matsuo, A., & Sonnenstuhl, I. (2009). Learning to encode possession. In McGregor, W. B (ed.), *The Expression of Possession* (pp. 143-212). Mouton de Gruyter.

藤原　他 (2006).「1 歳代の表出語彙の発達」『九州保健福祉大学研究紀要』7, 161-168.

Heine, B. (1997). *Possession*. Cambridge University Press.

Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structures*. MIT Press.

Langacker, R. W. (1995). Possession and Possessive Constructions. In J. R. Taylor and R. E. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World* (pp. 51-80). Mouton de Gruyter.

Li, C. N. and Thompson, S. A. (1976). Subject and Topic: A New Typology of Language. In C. N. Li (ed.), *Subject and Topic* (pp. 417-444). Academic Press.

Masuoka T. (2017). Topic and subject. In M. Shibatani, S. Miyagawa & H. Noda (eds.). *Handbook of Japanese syntax* (pp. 97-122). Mouton de Gruyter.

益岡隆志 (2020). 「主題構文としての日本語の名詞修飾節構文」プラシャント・堀江(編)『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』3-21.

松藤薫子 (2015).「日本語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察」『日本獣医生命科学大学研究報告』64, 34-43.

松藤薫子 (2016).「英語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察：動詞 have を含む発話文の分析から」『日本獣医生命科学大学研究報告』65, 25-33.

松藤薫子 (2018).「日本語の所有文の獲得について」『日本獣医生命科学大学研究報告』67, 18-29.

松藤薫子 (2023a).「言語研究における所有の概念に関する一考察」『日本獣医生命科学大学教職教育研究』1, 2-15.

松藤薫子 (2023b).「日本語の周辺的な所有表現に関する一考察」『日本獣医生命科学大学教職教育研究』1, 16-30.

松藤薫子 (2023c).「日本語，英語，中国語の所有の言語化について」『日本獣医生命科学大学　教職教育研究』1, 31-55.

MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk* (3rd edition). Lawrence Erlbaum Associates.

Mazzitelli, L. (2015). *The Expression of Predicative Possession: A Comparative Study of Belarusian and Lithuanian*. Mouton de Gruyter.

宮腰幸一 (2020).「日本語受動の類型論」『言語研究』157, 113-147.

宮田 Susanne 編，Brian MacWhinney 監修(2004).『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』ひつじ書房.

Myler, N. (2016). *Building and Interpreting Possession Sentences.* The MIT Press.
野地潤家(1973-77).『幼児言語の生活の実態 I～IV』文化評論出版.
Noji, J., Naka, N., & Miyata, S. (2004). Japanese –Noji Corpus. Pittsburgh, PA:TalkBank. ISBN 1-59642-058-8.
Seiler, H. (1983). *Possession as an Operational Dimension of Language.* Gunter Narr.
Stassen, L. (2009). *Predicative Possession*. Oxford University Press.
Taylor, J. R. (1996). *Possessives in English*. Oxford University Press.
Tsunoda, T. (2018). Inalienable possession in Japanese, English, and Warrongo. In P. Pardeshi & T. Kageyama, *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (pp. 557-585). Mouton de Gruyter.
Waugh, W. E. & Brownell, C. A. (2015). Development of body-part vocabulary in toddlers in relation to self-understanding. *Early Child Development and Care*, 185(7), 1166-1179.

On the diversity of possessive expressions for body parts and children's language development

MATSUFUJI, Shigeko
English Laboratory of the English Language
Nippon Veterinary and Life Science University

Abstract

This study focuses on the possession of one's own body parts with respect to the wide range of meanings of possession. Furthermore, it examines empirical data on the development of the acquisition of the forms in which meaning is expressed and discusses the universal principles involved in the encoding of possession. I argue that English-speaking children acquire subject-prominent language features early in their language development, while Japanese-speaking children acquire topic-prominent language features at a corresponding point. Moreover, I consider that English has external possessive constructions and no double-subject constructions, while Japanese has double-subject constructions and no external possessive constructions, due to these features and the law of complexity. I argue that if language acquisition theory assumes within the framework of generative grammar that it has laws that capture (a) the topic-prominent parameter and (b) the notion of complexity containing i) a correspondence between concept and form and ii) basic and derived relations among

conceptual/syntactic structures, it can explain the cross-linguistic variation and development of body part expressions.

Keywords: possessive expressions for body parts, child language development, cross-linguistic variation, topic prominent parameter, complexity